広域科学専攻年報「*Frontière*」第 13 号発刊にあたって

学際研究の勧め―駒場学派を目指して―

広域科学専攻長　菅原　正

冬の雑木林は，夏には生い茂った葉をすっかり落とし，引きしまるほど冷たい静けさの中に，それぞれの特徴ある枝振りを晒している．ケヤキの幹は，地面に近い辺りから分岐し，真っ直ぐ天に向かって伸びている．武蔵野のあちこちで見られる木だが，どこかハイカラな趣がある．銀杏は，太い幹の処々から，V 字型に何本もの枝を伸ばしている．それぞれの個性が美しい．普段見逃しがちだが，聳え立つ木立の地下には，これらの木々を支える根が張り巡らされているのであろう．一本ずつ独立しているかに見えるこれらの木々は，張り巡らされた根を通じて，互いの落葉からつくられた養分を，そして，同じ水脈から浸み出した水を吸い上げて枝葉に送っているのであろう．そこには，訪れる鳥，昆虫，土の中に生息する微生物も含めた生態システムがあり，林全体としての個性を形づくっている．

学問にも様々な個性がある．数理科学，物理学，化学，生物学，地学などなど．19 世紀，20 世紀と，これらの学問が発達する中で，それぞれに見事な学問体系と方法論を備えるに至った．この駒場キャンパスにある広域科学専攻は，数理科学，物質科学，情報科学，生命科学，認知科学などの多様な分野から構成されており，約 170 名の教員が，互いに協力しながら教育研究を推進している大規模な組織である．本専攻がある駒場キャンパスは，東京大学の 3 つのキャンパスの中でも特に「学際性・国際性」をミッションとしている．当然，本専攻も学際性，国際性に重きを置いているのだが，それに止まらず各研究分野において一流の研究者が集結しているところに最大の特色がある．このような環境の下で，これまで 2 つの学際的な COE が相次いで採択・実施され，優れた実績を挙げてきた．

では，学際的研究とはどの様な研究をいうのであろうか．本専攻の先生方の中にも，学際研究と聞くと，「一つの専門を極めるのさえ難しいのに二つの分野にまたがる研究などできる訳ないさ．底の浅い受け狙いの研究だね．」と苦虫を噛みしめる方も居られるだろう．しかし，ここでいう「学際性」とは単に「既存分野」の寄せ集めで達成されるものではない．自分の専門分野を一心不乱に研究していて，ある段階に到達した時，自分の見出した現象が，あたかも掘り当てた水脈の拡がりのように，他の分野の基盤と相通ずることに，突然気付くことがある．また，専門分野の本流からは外れていると思いながらも，止むに止まれぬ好奇心から始めた研究が，ある時機になって，にわかに近接する学問分野の研究者の興味を引き，共同研究が始まることもある．そしてやがて新事実が発見されるという醍醐味を味わうことになるであろう．我々の目指す学際性とはまさに，このように新たな学問領域が創出される知的ダイナミズムそのものを指すのだ．互いに高い水準にある研究者同士が，切磋琢磨しつつ真の学際研究をすることで，自分の専門に対する思いもよらなかった見方を学ぶこともある．そして，真の学際研究を仕上げた後で，自らの分野の見晴らしが格段に良くなったことに気付かされる．

教育研究面での本専攻の特徴は，リベラルな伝統を有していることにある．教員の研究体制として講座制を採用せず，若手研究者が独立して研究しやすい環境を確保してきた．このように若い研究者が伸び伸びと，だが学問に対する厳しさを忘れることなく研究できる環境でのみ，広い視野と高い専門性を兼ね備え，現代社会に横たわる複合的要因をもつ課題に取り組み，社会を活性化しうる人材が育って行くのだ．

専攻の構成員各位に申し上げたい．将来，駒場学派の研究が一時代を築いたといわれるような研究集団になろうではないか．やれ，法人化だ，大型プロジェクト予算の申請だ，社会連携，国際連携が大切だと振り回されること無く（もう少し丁寧に言えば，それぞれのノルマを誠実に果たしながらも，それに埋没することなく），毅然と前をみて進もうではないか．